
「新約のきよめ」

第19章 尊いことに使われる器

二種類のクリスチャン

一口にクリスチャンと言っても、二種類のクリスチャンがある。

世に対する明白で熱心な戦いを挑み、キリストの御国の促進のために奮闘努力する。

悪から遠ざかるだけでなく、善事に熱心で、神の戒めをさらに守ろうという努力を惜しまない。

自分のうちにこもらず、福音を携えて外に出て行く。

これをするクリスチャンと、しないクリスチャン。

これをするクリスチャンこそ、尊いことに使われる器。

有用なので、王のために用いられ、用いられることが榮譽。

尊いことに使われる器の特色① 聖められたもの

聖められたもの

その意味は、

新約聖書においてこの語は、分離と純潔。

旧約聖書においてこの語は、神聖な目的のためにとりわけておくこと。

両者は基本的に同じことを言っている。

聖化の根本的な思想は分離。

自分自身を不潔なすべてのものから分離して、心と生涯のすべてを神のみこころを行うためにささげる。

この意味で聖化は個人的で明確な行為。

献納は私たちの義務。浄化は神のわざ。

そこには私たちの決断がなければならない。

献納は聖化ではないが、聖化の人間の側の要素で、次の要素(神がしてくださるわざ)のために道を備える。

浄化は神のわざ。

私たちが自分の義務を果たすとき、神はご自分のわざをなしてくださる。

全く聖くされるとは、たましいの中で神に反抗する一切のものから解放されること。それを聖書は欠けたところがない、責められるところがない、と言っている。

私たちに要求されているのはすべてを明け渡すこと。あとは神がなさる。

特色② 主人にとって有益なもの

有益であるとはふさわしいこと

私たちの役割は、神の恵みを人々のたましいに導く導管。

だからふさわしいとは、その管が、汚れや悪などでつまっていないこと。

きよめと有益さは連結している。

単純な善意と、生活の聖さと、全き献身は人間のどんな熟練にも比べられないほどの力を与える。

きよめなしでも神のために働くことはできるが、わずかな周辺の働きしかできない。

個人的な聖めは、主の用のためにささげるべき第一の貢ぎ物。

これがささげられるまで、主に受け入れられる奉仕をすることはできない。

聖別されていることが、用いられる備え。

器具のふさわしさも結果に影響を与える

器具の有用性は、それを使う人にかかっていることは事実。
力は神のものであることも事実。
しかし、器具のふさわしさも結果に影響を与える。

驚くべきことに神は人間という道具を通して働かれる。

ぶどうの木は枝を通して実を結ぶ。
だからこそ、私たちが有益な者となることは重要。

これはささげきっていないクリスチャンが、いっさい有益であり得ないという意味ではない。

しかし、主の最高の目的のためには、きよめられた器が使われる。

主が私たちを必要としておられる。

特色③ あらゆる良いわざに間に合うもの

これは、あらゆる種類の奉仕のために準備できていること。

きよめは私たちのすべての力を始動して、最良の方向に向かわせる。

どんな奉仕であっても、気高い動機によって、尊いものとされる。
活動よりも性格の方がずっと重要。

私たちの聖さの尺度は、私たちの力の尺度。

「あらゆる」とあることに注目。

有益な器は、特殊な分野に限定するのではなく、どんなことでも
する備えができていく器。